

教職大学院における短期海外研修とその意義

—— 参加者のアンケートとレポートから ——

*高 橋 亜紀子

Significance of Short-term Overseas Study Program for Graduate School for Teacher Training:
The Results of Questionnaires and the Reports

TAKAHASHI Akiko

要 旨

本学の教職大学院の短期海外研修は、平成22年度に「大学間特別交流事業」として始まり、平成24年度より正規の科目「海外教育事情総合演習」となった。本稿では、この研修の概要及び内容を報告するとともに、参加者に対して行ったアンケートと参加者が書いたレポートを分析することによって、本研修の評価と参加者の学びについて調べた。その結果、参加者には現職教員と教員経験のないストレートマスターとがおり、両者の学びには共通点及び相違点があることが分かった。現職教員は、教育現場での指導の課題や教育の在り方、教員研修など自身の職務に関する学びが多かったのに対し、ストレートマスターは現地の人々や文化に触れることで、異文化体験や交流の大切さなどへの言及が目立った。両者ともに、海外研修を通して、日本や日本の教育を客観的に捉え、新たな視点・視野を広げていることが分かった。これは、教員に求められるグローバルな視点を持つことにもつながることから、本研修は意義のあるものとして位置づけられる。

Key words : 教職大学院 (Graduate School for Teacher Training)

短期海外研修 (Short-term Overseas Study Program)

日本と韓国の学校教育 (School Education in Japan and Korea)

現職教員 (In-service Teacher)

ストレートマスター (Graduate Students)

1. はじめに

グローバル化社会において、日本と他国との相互依存関係が複雑に深化している中、世界の現状に対する理解の促進や、異なる価値観・環境に対する適応力・対応力を持ったグローバル人材の育成は、日本における喫緊の課題である(文部科学省国立教育政策研究所・JICA 地球ひろば共同プロジェクト, 2014)。このような社会情勢において、日本の将来を担う子どもたちの

教育にも変化が求められており、教育基本法第2条(教育の目標)・第5項にも「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。」と明記されている。

グローバル化は日本国内でも着実に進んでおり、平成25年末現在、日本で暮らす外国人は206万人いる。日本人と結婚した外国人配偶者も増加しており、日系人をはじめとして、定住化も進んでいる。これに伴い、

* 宮城教育大学国際理解教育研究センター

日本の学校で学ぶ外国人児童生徒数も平成24年5月1日現在で、71,545人となっている。この数に、両親のどちらかが外国にルーツを持つ子どもの数も加えれば、さらに増えると予想される。このように日本国内にも、多様な文化・価値観を持つ人々が多数生活しており、学校内でも、日本の子どもたちが異なる文化背景を持つ子どもたちと、互いの違いを認め合い、共に学ぶという国際理解教育や異文化理解教育の充実がますます求められている。

こうした子どもたちを指導する教員自身もグローバルなものの見方や考え方を身に付ける必要がある(教職課程の質の保証等に関するワーキンググループ、2012)。では、グローバルなものの見方や考え方を身に着けるには、どうしたらよいのだろうか。文献を読み知識として理解することも重要ではあるが、地域に在住する外国人や留学生と実際に交流したり、海外に行って現地の人々と交流したりすることなども必要であろう。しかし、教員は多忙を極めており、このような経験を積む機会さえないのが現状である。

本学の教職大学院で学ぶ、現職教員は、1年次在学中に本務校から離れて大学での勉強に専念している。こうした教員を対象として始まった本学の短期海外研修の概要を報告するとともに、参加者への振り返りアンケート及び参加者のレポートをもとに、本研修の成果及び意義について検討する。

2. 授業科目になるまでの経緯

平成22年1月に、本学の国際交流協定校、韓国の大邱教育大学の「教育大学院」(日本の教職大学院に相当する)で学ぶ現職の小学校教員20余名が本学を訪問した。その際、本学の附属小学校を見学し、本学の教職大学院の院生と双方の教育について懇談した。これに参加した院生や教員から、双方の教育に関する取り組みやシステムを知ることは大変有意義であるという声が出され、共に現職教員である院生同士の交流と研鑽の場を設けることとなった。

実施に向けて、教職大学院に特別研修実行委員会が設置された。平成22、23年度の2年間は「大学間特別交流事業 大邱教育大学他との日韓交流体験」という形で実施した。大邱教育大学とは隔年で相互訪問したいと考えていたが、平成23年3月の東日本大震災によ

る原発事故の影響で、韓国からの本学訪問の実現は困難になった。

平成22、23年度の研修は4泊5日で、大邱教育大学校附設初等学校の見学や韓国の大学院で学ぶ現職教員との交流を中心としたプログラムであった。費用は約11万円であるが、学長裁量経費や日本学生支援機構の奨学金などによる補助によって、個人負担を5万円程度に抑えることができた。参加者は22年度が13名、23年度が17名で、研修も概ね好評であった。

研修に参加した学生の研修レポートには、「韓国の教育事情を知ることで、日本の教育を見直すことができた」「韓国文化に触れ、人々との交流から外国を知るこの大切さを考えた」「韓国の院生や学生との交流から、外国を肌で感ずることができた」「世界に目を向けた教育の必要性を感じた」などのコメントがあり、現職教員にとって本研修は海外を知るよい機会であることが分かった。

その結果、平成24年度から、教職大学院の教科・領域専門バックグラウンド科目群の1科目として「海外教育事情総合演習」が正式の授業科目となった。

3. 「海外教育事情総合演習」の実施概要

3.1. シラバス

まず、この授業のシラバスについて簡単に紹介する。授業の担当者は筆者である。

- (1) 概要：海外の協定校のある諸国(韓国)の概要を知り、その国の教育の特色を理解することを通し、国際理解教育に関する素養を高める。
- (2) 授業の到達目標：海外の協定校(韓国)を中心とした学校実践を学ぶことを通して、高度な教職実践力を涵養することを目的とする。海外の協定校を中心に、各国における教育の事情を知るとともに、その文化的背景とのつながりを理解する。
- (3) 授業計画
 - ・協定校のある国の教育事情概要の理解
 - ・対象となる国の文化・ことばについての理解
 - ・協定校視察および教育事情に関する意見交換
 - ・協定校所在地域等の学校視察と情報交換
 - ・協定校在籍の大学院生(現職教員)との情報交換
 - ・協定校所在地域の大学等の視察と情報交換
 - ・対象となる国の文化・社会事情の視察

- ・協定校のある国の教育事情の理解と情報交換内容の総括
- ・まとめ

- (4) 評価の観点：事前研修の発表30%、現地での発表・討論20%、最終レポート50%
- (5) 成績の評価方法：個人報告、ディスカッションへの貢献度を軸に、総合的に判断する。

3.2. 授業開始までのガイダンスや準備等

まず、4月の履修登録前に、ガイダンスを行った。ここでは、昨年度までの研修内容や日程、費用等について詳しく説明し、参加者が具体的なイメージをつかめるように配慮した。授業であるため、参加者の選考は特にしていない。

参加者決定後にも、何度かガイダンスを実施し、参加者が見学を希望する校種や授業科目などについてのニーズを聞き取った。海外渡航の手配は旅行会社に依頼した。現地での手配は、大邱教育大学の教育大学院の担当者、東国大学校・日語日文学科の担当教員に依頼し、こちらのニーズを伝えたくて、メールでやりとりをしながら、訪問先、具体的な交流内容などを決めた。

3.3. 参加者

平成23年度の参加者は13名で、現職教員7名、教職経験がないストレートマスターの学生6名であった。平成24年度の参加者は16名で、現職教員6名、ストレートマスターの学生5名、国語及び特別支援の大学院生が各1名（うち1名は中国からの留学生）であった。このように、現職教員に加えて、ストレートマスターの参加者も増える傾向にある。引率は、筆者のほかに、教職大学院の教員1名と職員1名が行った。

3.4. 費用

平成23年度は、総額101,440円のうち、学長裁量経費より8万円の補助があり、個人負担は21,440円であった。平成24年度は、総額117,020円のうち、日韓交流基金より航空券代56,720円、学長裁量経費より25,000円の補助があり、個人負担は35,300円であった。

費用には、航空運賃とホテル代、ソウル・大邱・慶州間の鉄道運賃、慶州での借り上げバス代が含まれている。しかし、現地でかかるその他の交通費、海外旅

行保険料や自主研修時の小遣い等は含まれていないため、個人負担額に加えて、3~5万円の自己負担が発生した。

3.5. 事前研修

3.1. のシラバスにも示したように、事前研修では、訪問先の韓国という国、韓国の教育の特色などを理解することをねらいとしている。具体的には、韓国の教育システムや教育事情、歴史、文化、言葉などを学ぶ。

新学習指導要領の小学校「社会」には、第6学年の内容として、以下のようなものがある。

- (3) 世界の中の日本の役割について、次のことを調査したり地図や地球儀、資料などを活用したりして調べ、外国の人々と共に生きていくためには異なる文化や習慣を理解し合うことが大切であること、世界平和の大切さと我が国が世界において重要な役割を果たしていることを考えるようにする。

ア 我が国と経済や文化などの面でつながりが深い国の人々の生活の様子

このように、児童は外国の人々の生活や文化・習慣について自分で調べて学ぶ。項目アに関しては、教科書に、韓国も掲載されている。そこで、事前研修においても、児童と同じように、参加者それぞれが分担したテーマについて調べたことを発表するという形式で進めることにした。また、自国のことを他国の人にわかりやすく伝えることもグローバル社会においては重要な能力である。そこで、現職教員には、韓国の現職教員を対象に、日本の教育についてプレゼンテーションをすることを課題とした。発表言語は英語または日本語とした。一方、ストレートマスターの学生には、海外で日本語を学ぶ大学生を対象として、現在の日本や日本の大学生を紹介するプレゼンテーションをやさしい日本語で行うことを課した。

事前研修の内容は、平成24年度に実施したものを例として表1に示す。

表1の「危機管理」では、本学の「危機管理マニュアル」に従って指導するとともに、参加者全員に海外旅行保険に加入することを義務付けた。また、加入した保険を明記した「海外研修受講届」も提出してもらった。参加者の約半数は海外渡航経験がないため、パスポートの取得、海外で特に気を付けるべき言動や行動、

表1 平成24年度の事前研修

月 日	時 間	研修・活動内容
1 6月21日	12:15 } 13:00	1. 実施計画の確認 ・係分担決定 ・情報交換会での質問事項 2. 事前研修計画(内容・係の確認)、 今後の日程確認
2 7月1日	12:15 } 13:00	1. プレゼン内容の検討・担当者決定
3 7月30日	10:00 } 13:00	1. プレゼンテーションの作成に向けて (大邱教育大学校・東国大学校) 2. 韓国の歴史・文化・教育制度・ 韓国語の基礎 3. 情報交換会での質疑事項検討 4. 自主研修企画の検討 5. 必要な準備物の確認
4 8月19日	10:00 } 13:00	1. 韓国語研修(韓国人講師) 2. プレゼンテーションの予行練習 3. 自主研修計画について 4. 研修中の危機管理 5. 必要な準備物等の再確認 6. 事後研修計画の確認 7. 旅行者による日程確認、準備物 等の説明
5 9月18日	10:00 } 12:00	1. 出発直前オリエンテーション 2. 研修中の危機管理 3. 諸注意

貴重品の管理などについては十分に説明し、参加者が不安を感じないように配慮した。

3.6. 現地研修

現地研修は、平成24年度は9月23日～27日の4泊5日、平成25年度は6泊7日で実施した。日程を伸ばしたのは、見学する学校を増やすためである。

平成24年度の学校見学は、大邱教育大学校附設初等学校の1校のみであったが、平成25年度には、大邱滞在中が2日となり、慶北大学校師範学部附設中学校、英語村、大邱ヨンゲ小学校の3校を見学することができた。加えて、両年度とも、大邱教育大学校を訪問して大学院生(現職教員)との情報交換会を実施した。その他には、慶州の東国大学校では日本語を学ぶ大学生と授業内・外での交流を行った。ソウルの自主研修は、参加者が個人またはグループに分かれ、行きたいところを事前に調べ、筆者のアドバイスを受けたうえで、実際に行ってみるといった研修を行っている。ここでは、平成25年度の日程を表2に示す。

3.7. 訪問した学校について

3.7.1. 大邱教育大学校附設初等学校

大邱教育大学校附設初等学校は、1956年に大邱教育大学の附設小学校として創設された。1～6年は各3クラス、特別支援学級1クラスの合計19クラス、児童数460名、教職員数35名の学校である。1クラスあたりの児童数は24名だが、6年生のみ33名である(平成23年9月現在)。教員はすべて修士課程以上を修了し、かつ選抜された教師である。教育目標は4つで、①新たに考えずすんで学ぶ子ども、②他の人に配慮し秩序と規則を守る子ども、③体も心も健康な子ども、④自己実現のために未来を育む子ども、である。学年毎に「伝統文化」「歴史文化体験」などのテーマが設けられており、日本の総合学習のような学習が行われている。日本では見られない特色ある取り組みとしては、保護者が「名誉教師」として学校教育を支えている点である。図書館管理補助や登校時の安全確保、体験活動の補助、活動を伴う授業中の補助などだけでなく、それぞれが得意とする分野を子どもたちに教える活動も行うという。300人以上の保護者が学校運営や子どもたちの学びをサポートしており、今回の訪問でもこのような保護者を学校内で何人も目にした。

校長から学校の概要説明を受けた後、学校の施設や各学年の授業を見学した。各教室には実物投影機、パソコン、大型テレビが設置されていて、教員はそれらのICTを活用して授業を行っていた(図1)。



図1 教室の様子

どの授業でも子どもたち自身に考えさせるグループ活動が積極的に行われていた。英語の授業は英語のみで行われており、子どもたちは積極的に英語で応じていた(図2)。

表2 平成25年度の研修日程

	月 日 (曜)	行 程
1	9月23日 (月)	仙台空港集合・出発→(OZ151)→仁川空港→空港鉄道→ソウル駅 (KTX157) →東大邱駅着→(大邱教育大学校バス)→ホテル
2	9月24日 (火)	午前:慶北大学校師範学部附設中学校(学校見学及び授業参観) 午後:英語村見学・大邱薬令市博物館見学
3	9月25日 (水)	午前:大邱ヨンゲ初等学校(学校見学及び授業参観) 午後:大邱教育大学校(総長挨拶、大学紹介・見学、大学院生との情報交換会)
4	9月26日 (木)	ホテル→(貸切バス)→慶州市内見学→東国大学校着/授業参加(貸切バス)→昼食→学生との散策→ (貸切バス)→慶州駅着・発→(KTX150)→ソウル駅着→(タクシー)→ホテル
5	9月27日 (金)	自主研修(1) ①世界遺産見学、②自由見学 夕食会→演劇「ピバップ」鑑賞→ホテル
6	9月28日 (土)	自主研修(2) ①板門店見学、②ソウル市内見学、③自由見学
7	9月29日 (日)	ホテル発→(空港バス)→仁川空港→(OZ152)→仙台空港・解散



図2 英語の授業の様子

3.7.2. 慶北大学校師範大学附設中学校

この中学校は、1946年に慶北大学校の師範大学(日本の教育学部に相当)の附設中学校として創設された。1~3年各7クラスの全21学級、生徒数764名、教職員数は57名の学校である(平成25年9月現在)。1クラスあたりの生徒数は40~50名程度で、小学校と比べて多い。この学校の大きな特色は、ソウル大学校「幸せ教育センター」と協約し、「幸せ学校」を学校の経営目標にしている点である。概念となるのは「幸せに生きる力を学び、意味のある成長をする学校」、哲学は「幸福権の保証・自発性を尊重・成長への支援・地域性を尊重」、ビジョンは「今日、私たちは幸せでした、そして共に成長しました」である。この教育を通して、生徒が「幸

せに生きる力」を学び、自分のキャリアについても考えることになるという。

校長による学校説明を受けた後で、数学、社会など様々な授業や学校施設を見学した。クラスの人数が多いためマイクを使って授業を行う教員もいた(図3)。



図3 英語の授業の様子

この学校では、外国語として日本語の授業も行われており、授業では生徒の興味を引くようにアニメやマンガを利用するなどの工夫がされていた。なお、この学校にも各教室には大型テレビが設置され、プロジェクターとして使用されていた(図4)。

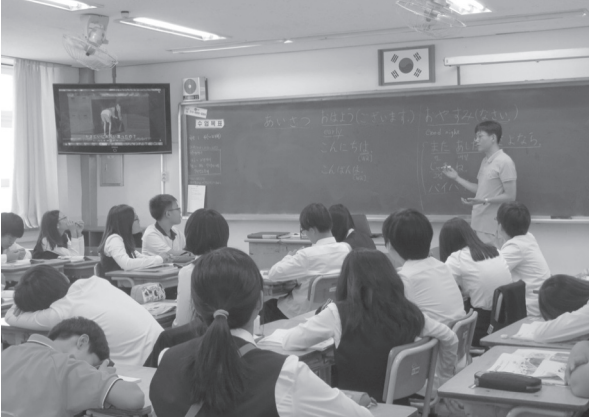


図4 日本語の授業の様子



図5 英語の授業の様子

3.7.3. 大邱ヨンゲ初等学校

この初等学校は、1944年に創立された公立の学校で、1～3年は各4クラス、4～6年は各5クラス、特別支援学級1クラスの合計28クラス、児童数594名、教職員数63名の学校である（平成25年9月現在）。この学校には、3～5歳児を対象とした幼稚園も併設されている。1クラスあたりの児童数は20～24名である。教育目標は、①新たに考える子ども（創意人）、②進んで学ぶ子ども（自律人）、③正しく行動する子ども（道徳人）、④心も体も健やかな子ども（健康人）、の4つである。この学校は、大邱教育大学校の学生の実習校ともなっている。

学校の概要説明は、本学に留学したことがある韓国人の教員が日本語で行った。施設見学を行った後で、5年生の英語の授業「私のすてきな休日」を1コマ通して見学することができた。教室は英語学習専用で、子どもたちが英語を楽しく学べるような環境が整っている。授業は、韓国人教師とカナダ人のALTのチームティーチングで、すべて英語で行われていた。イラストや写真だけでなく、ドリル練習も楽しく学べるようにゲーム教材も導入されていた。担当の韓国人教師は優秀教員コンテストで2011年に優勝した経験があり、英語力はもちろん授業を上手に進める実力もある。授業では、子どもたちがお互いに助け合いながら楽しく学べるような工夫が随所に見られた（図5）。

3.7.4. 英語村

英語村とは外国に行かなくても「疑似外国体験」ができる英語体験施設のことである。訪問した英語村は韓国永進専門大学がコロラド州立大学と提携して設立した施設である。韓国の小学校では、1997年に3年生か

ら英語が正規教科となった。教育熱心な韓国では、海外に留学する児童まで増えたため、教育格差の問題が生じないようにとの配慮から韓国国内に英語村が設置された（カレイラ、2013）。この英語村には、実物の飛行機や空港、免税店、スーパー、郵便局、カラオケルーム、タクシー、交番、家庭の台所や居間などがある。また、英語のネイティブ教師が約50名おり、子どもたちは疑似海外生活体験をしながら、生きた英語の練習ができる。3.7.1.の大邱教育大学校附設小学校の4年生もこの英語村で4泊5日の体験学習を行っている。

この英語村では、小学校4～6年生を対象とした4泊5日のコースを実施している。コースとして、①英語圏の文化を理解して習得できる体験学習、②小学校教科の中心である算数、社会、理科、音楽、美術、体育、家庭科の科目をイメージ形式の英語教育で学ぶ深化学習、③夜間活動などの遊び中心の学習、を提供している。イメージ形式というのは、目標言語である英語を使用する環境に浸かって他の教科も学ぶというものである。具体的なプログラムの例を表3に示す。

3.7.5. 大邱教育大学校教育大学院

大邱教育大学校の教育大学院は、1996年に創立された修士課程のコースである。教育目標は、初等教育分野で理論的実践的研究能力を持った中堅教育専門家の養成である。初等教育学科のみで27専攻ある（2013年）。夜間制の場合は2年6か月（5学期制）、季節制の場合は3年（6学期制）の課程である。学生数は、夜間制が472名、季節制が446名で、合計918名が学んでいる（2013年）。夜間制は18：00～20：50までの3校時、季節制は初等学校が夏季・冬季休暇を利用して9：00～16：50までの

表3 英語村の4泊5日コース

時間	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
8:00 8:45	運動・朝食				
9:00 10:30	オリエンテーション 空港 出国 審査 搭乗	ファースト フード	理科	郵便局	食料品店
10:45 12:15	銀行	家族 センター	放送局	グリーン エネルギー	病院
12:20 13:45	昼食・課題解決型活動				修了式
14:00 15:30	自己紹介	体育	交通	料理	
15:45 17:15	読み書き	算数	社会	ギフト ショップ	
17:20 18:45	夕食・課題解決型活動				
19:00 20:00	夜の オリエン テーション	オリンピック ゲーム	クイズ 選手権	音楽のタペ	
20:00 21:30	フリートーキング、シャワー、 健康チェック				
21:30 22:00	就寝				

6校時の授業が提供されている。

専攻は27あり、国語、算数、社会、理科、体育、音楽、美術、家庭・環境教育、教育行政、教育課程・授業、英語、特別支援、コンピュータ教育、幼児・児童教育、教育学、英才教育、児童文化、学校心理、教育思想、倫理人性、児童スポーツ、多文化教育、第二言語としての英語教育、相談教育、造形制作、現場科学実験教育、児童発明である。修士課程修了に必要な単位は、夜間制は27単位（特別支援教育は36）、季節制は30単位（特別支援教育は39）で、論文審査及び口述審査がある。

三石（2008）によると、韓国の教育大学院は全国で134か所に設置され（2006年末現在）、2183専攻、定員2万535名で、1999年以降に設立された教育大学院では現職教員の占める割合が高く、韓国における現職研修は教育大学院での現職研修が重要な位置を占めることが一つの特徴であるという。

本研修では、この教育大学院で学ぶ現職の小学校教員6～10名と本学の参加者として、5～6名の小グループを

作り討論を行っている。

はじめに本学の現職教員参加者が「日本の教育」というテーマで、日本の学校や仕事の様子などをスライドで紹介しながら15分程度発表する。その後、グループ討論を約1時間半行う（図6）。



図6 グループ討論の様子

グループ内で自己紹介をした後、それぞれが学校現場で抱えている問題などについて話しながら、両国の教育の相違点や共通点、教育観などについて情報交換を行う。グループ構成にあたっては、現職教員とストレートマスターが偏らないように配慮している。また、懇談の場で困らないように、韓国の教員に質問したいことを事前研修時に考えてもらっている。事前に出てきた質問には、教員を仕事として選んだ理由と仕事のやりがい、授業作りの工夫、宿題の出し方、評価の仕方、教員の研修方法、給料、塾と学校の関係、特別支援教育、ICT教育の在り方、保護者への対応の問題、子どもの体力低下の問題、いじめ、教育で大事にしていることは何か、などがあり、参加者は様々な問題に興味を持って討論に臨んでいることが分かる。ただし、グループ討論ではこれに縛られることなく、自由に意見交換を進めていいことにしている。

グループ討論は、韓国側は韓国語で、日本側は日本語で行う。通訳のサポートは、本学に留学したことがある韓国人の学生と現職教員、本学から大邱教育大学に留学している日本人学生である。

3.7.6. 東国大学校日語日文学科

東国大学校は、仏教系の私立大学で、本部がソウルにある。人文社会学科に日語日文学科があり、学生は日本語と日本文学を中心に学んでいる。在学中に日本

に留学する学生もあり、本学の参加者と交流する3、4年生は、日本語での交流が可能である。

本学の参加者は韓国について通訳を介さず日本語で話ができる。東国大学の学生にとっても、日本人と直接会って話せる機会はあまりないので、日本語の練習になるのはもちろん、学習への動機づけにもなることから、この交流は双方にメリットがある。

日本語の授業に参加し、まず、ストレートマスターの参加者が、本学の紹介や日本の大学生の生活などについてスライドを交えてやさしい日本語で紹介した(図7)。



図7 プレゼンテーションの様子

その後、4~5人のグループに分かれて、テーマは特に決めずに自由に討論を行った。内容は、韓国の学生の子ども時代の勉強や生活の様子、学生生活、軍隊、就職、日韓文化の相違点などであった。

授業の後は、慶州市内で昼食をとり、韓国の学生の案内で散策しながら、自由に交流を楽しんだ。慶州は新羅の都があったところで、古墳公園など見どころも多いところである。

4. 研修の成果

本研修の参加者がどのようなことを学んだのかについて、研修終了時に行った参加者の振り返りアンケートとレポートをもとに分析を行う。

4.1. アンケート

ここでは、事前研修と現地研修に関するアンケート

の結果と参加者のコメントを取り上げる。平成23年度は参加者13名中13名の回答(回答率100%)、平成24年度は参加者16名中12名(回答率75%)であった。質問に、「とても良い」「良い」「普通」「悪い」の4段階で評価してもらった。

以下に、質問1~8を示す。

質問1: 事前研修の内容

質問2: 大邱教育大学校附設小学校(24年度のみ)

質問3: 慶北大学校師範大学附設中学校(25年度のみ)

質問4: 英語村(25年度のみ)

質問5: 大邱ヨンゲ小学校(25年度のみ)

質問6: 大邱教育大学校 グループ討論会

質問7: 東国大学校・学生交流

質問8: ソウル自主研修

この結果を表4に示す。

表4 アンケートの結果(%)

年度	とても良い		良い		普通		悪い	
	H24	H25	H24	H25	H24	H25	H24	H25
質問1	67	54	33	46	0	0	0	0
質問2	75		25		0	0	0	0
質問3		23		77	0	0	0	0
質問4		62		38	0	0	0	0
質問5		62		38	0	0	0	0
質問6	92	92	8	8	0	0	0	0
質問7	75	62	17	38	8	0	0	0
質問8	67	85	25	15	0	0	0	0

表4に示したように、質問1~8で「普通」「悪い」の評価はなく、どれも「とても良い」「良い」で、参加者の満足度が高いことが分かる。

質問1の事前研修へのコメントとして「自分たちで分担・研修できる機会を多く設定していただいたおかげで、より主体的に学んでいくことができたと思います」「韓国のイメージをつかむことができた」「プレゼンの練習ができてよかった」「韓国語会話の練習を韓国の方から直接行っていただけたのがよかった」などの肯定的なコメントがあった。その一方で「もっと韓国語を勉強すべきだった。」「韓国人とのコミュニケーションをとる場合があったので、もっと韓国語を勉強しておけばよかった」などのコメントがあった。このことから参加者が現地で多くの韓国人と接し、韓国語で交流でき

ればよかったと考えていたことが分かった。

質問2～5の学校訪問については、「学校施設を丁寧に案内してもらったり、授業を快く参観させてもらったり、とても勉強になった」「小学校で参観した授業は日本ではなかなか見られないスタイルのものだったので特によかったです」というコメントが見られた。しかし、「数学の授業が見られなくて残念だった」「他教科の授業も見たかった」「様々な学年、様々な教科の取り組みは見ることができたのはよかった反面、じっくり1時間の展開を見ることができず、渡りとなってしまったのが残念だった」「授業をもっとじっくり参観したかったです」「限られた授業しか観察できず残念でした」というコメントからは、参加者には様々な教科の授業をじっくり見たいという強い要望があることが分かった。こうした要望については、現地の学校に事前に申し入れしてはいるものの、学校側の都合もあり、なかなか要望通りにはいかないところがある。今後も引き続き、交渉していきたいと考えている。

質問6のグループ討論会については「現職の先生と交流する機会を持てたことで、韓国の教育事情について具体的に知る事ができました」「韓国の現職の先生方などから様々な韓国の教育事情について話していただきとても勉強になりました」「韓国の実態がよく見えて本当に貴重な場だったと感謝しています」「意見交換はとても有意義でした」「現職の先生とお話してきて、貴重な時間を過ごせた」というコメントが多く、有意義であったと考えられる。その他には「グループで話し合った内容を共有する時間があるとうれしい」「もう少し交流する時間が多いとよい」という意見もあり、グループ討論の時間や進め方などについては、来年度以降の検討していきたい。

質問7の東国大学の学生との交流は「もっとインタビューしてお互い本音トークをしたかった」「韓国の方はとてもフレンドリーで、交流をすることでお互いの価値観や、国でのいろいろな違いを見出すことができましたと思います」「貴重な時間を過ごせ有意義だった」というコメントがあり、こちらも有意義な交流であったと考える。そのほかには「東国大学の紹介も聞いてみたかった」「日本語の授業風景も見たかった」などのコメントがあった。

質問8のソウルでの自主研修は、平成25年度の方が平成24年度よりソウル滞在が長いことからより満足度が

高いことが分かる。「自主研修は1日にしたからこそ、多くの地を訪れることができた、世界遺産、街並み、文化と味わうことができ、満足している」というコメントがあった。その一方で、「自分たちで計画を立案したが、コース全体の時間の見積もりが甘かったことが反省点です」「もう1日あれば板門店に行けたのに」「実際に行ってみてから、予備知識として各地の歴史などをもっと調べておくとよかったと感じたので、自主研修スポットなどはある程度早めに考えておくべきと思いました」などのコメントもあった。自主研修は、韓国の歴史や文化などを自主的に調べるきっかけにもなるものなので、今後は時間をかけて準備するようにアドバイスしていきたい。

4.2. レポート

ここでは、参加者が書いたレポートを分析する。現職教員とストレートマスターがそれぞれどのような点に注目し考えていたのかを、キーワードとしてまとめた。現職教員を表5に、ストレートマスターを表6に示す。

表5 現職教員のキーワード

(1) 教育内容・環境

- ・少人数教育
- ・発表力、表現力の育成
- ・教室内の生活文化の違い（裸足）
- ・机の配置
- ・授業形態
- ・環境整備（水サーバー、多目的スペースなど）
- ・教室の掲示物・掲示方法
- ・教員のための教材研究室（A）
- ・ICT環境の充実（B）
- ・タブレット端末の利用
- ・個性を伸ばす教育
- ・全国学力テスト
- ・学習指導要領と国の方針の関係
- ・睡眠不足か疲れ気味の生徒が多い
- ・眼鏡をかけている児童の割合が高い

(2) 家庭と学校

- ・塾と学校の関係（C）
- ・家庭と学校の連携（D）
- ・保護者のサポート

<p>(3) 英語教育</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語教育のレベルの高さ (E) ・英語で英語を指導 ・教員の英語研修の充実 <p>(4) 教員</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員の誇りと自信 ・教員が尊敬される存在 ・教師研修の充実 ・質の高い授業 ・優秀教員コンテスト ・多忙な教員 <p>(5) 問題点・課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学級経営 ・ADHDの子どもへの対応 ・特別支援教育・統合教育 (F) ・モンスターペアレント ・不登校 ・小5、中2の無気力 ・いじめ、ネットいじめ (G) ・学校暴力 (H) ・携帯電話の取り扱いに対する指導 <p>(6) 社会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・板門店 (I) ・兵役制度 ・特殊目的・職業訓練高校への進学人気 ・学歴重視社会の中での若者の就職難 ・「幸せ教育」までしなければならない韓国社会 ・海外から見た日本の歴史 <p>(7) 文化・交流</p> <ul style="list-style-type: none"> ・異文化・習慣の違い

<ul style="list-style-type: none"> ・STEAM教育とその実践 <p>(2) 家庭と学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・塾と学校の関係 (C) ・保護者と教師の関係 (D) ・学内で実施している保護者向けの外国語教室 <p>(3) 英語教育</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語教育のレベルの高さ (E) ・英語の掲示物 <p>(4) 教員</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師の評価 ・教師の帰宅時間 ・長期休暇の自己研鑽 <p>(5) 問題点・課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別支援教育・統合教育 (F) ・いじめ (G) ・暴力 (H) <p>(6) 社会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・板門店 (I) ・韓国人大学生の生活 <p>(7) 文化・交流</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言葉が通じる・通じない体験 ・非言語コミュニケーションの大切さ ・一人一人との交流の大切さ ・日韓関係は緊張していても一人一人は友好的 ・異文化理解 ・異文化体験の楽しさ ・現地の人々との交流の楽しさ

表6 ストレートマスターのキーワード

<p>(1) 教育内容・環境</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教室や施設の素晴らしさ ・教室の国旗 ・体育の教具と教材 ・低学年教室に設置されているトイレ ・学年フロアにある教材研究室 (A) ・ICT環境の充実 (B) ・給食 ・日韓の教育内容の違い
--

表5と表6の下線部 (A)～(I) の項目は、現職教員とストレートマスターに共通して見られた点である。両者ともに (1)～(7) の観点が見られた。(1) 教科内容・環境では、現職教員は施設面だけではなく、授業でどんな力を伸ばそうとしているのか、子どもたちの様子にも注目していることが分かる。ストレートマスターのほうは、施設面の言及が多い。(4) 教員では、現職教員が情報交換の中で韓国の教師の堂々として自信のある態度とその自信がどのように生まれてきているのかについて考えていたと思われる。(5) 問題点・課題では、現職教員のほうがストレートマスターよりも、具体的な問題を抱えているため、情報交換がしやすかったと思われる。

ストレートマスターに特徴的だったのは(8)文化・交流に関する点である。韓国の現職教員や大学生と情報交換をはじめとする様々な交流が印象に残ったようである。韓国の人との言語あるいは非言語によるコミュニケーション、韓国という異文化の中での様々な体験、日韓関係が冷え込んでいる中でも一人一人と交流することの大切さなどが挙げられていた。

このように、学校見学や韓国の教員との情報交換をする中で、現職教員の参加者は、韓国と自分が教えている日本の現場とを常に比較しながら考えていたと考えられる。一方、ストレートマスターの参加者は、学校については教室環境など目に見える部分に興味をひかれていた。彼らは学校現場で教えているわけではないので、現職教員と同じような視点で研修を捉えることはできなかったと思われる。しかし、彼らからは文化・交流に関する点が多く言及されており、異文化体験や交流の素晴らしさを感じていたようである。こうした学びは、彼らが教員になった際に、異なる文化の人々との交流は楽しいものだ子どもたちに伝えることにもつながるのではないだろうか。

最後に、参加者のレポートの一部を紹介する。

まず、現職教員の参加者が書いたものである。下線は筆者が引いたものである。

- (1) 日本と韓国は、歴史・文化・風習・環境こそ違いはあるが、子どもたちの様子に大きな違いはないことが伺える。
- (2) 韓国で感じた互いの国の良さを現場にも還し、子どもたちの国際感覚を育てる取り組みにつなげていきたい。
- (3) 研修を通して、我が国とは文化や習慣、システムの異なる面も多い韓国において、国の将来を担う子どもたちをどう育てているのか、その一端に触れさせていただいた。最大の収穫となったことは、日本の教育を改めて俯瞰できたことである。すべてではないにせよ、韓国の教育方法や環境等の良さや特徴を学んだうえで、意見交換を通して、自分の教育実践はもとより、自国の教育の特徴をじっくり振り返ることができたと感じている。
- (4) 学校訪問や学生同士の意見交換会など、韓国の教育についていろいろと学ぶことができ、今までと違った視点で教育を考えるよい機会になっ

た。韓国の進んだ教育を目にすることができただけでなく、日本の教育の課題や日本の教育のよさにも気づくことができた。自分の教育に対する考え方や視野が広がったように思う。

- (5) 韓国の学校訪問を終えて印象に残っているのは、教師の意識の高さ、仕事に対する誠意などである。韓国の現職教員の方が話す言葉には、自信と意欲が強く感じられた。
- (6) 特に、現地の方々と実際に交流する中で、韓国の教育事情を知るだけでなく日本の教育について考えるよい機会にもなりました。
- (7) 特に、日本の教育そして自分のこれまでの教育観を改めて見直すよいきっかけになったと考えている。また、韓国の教育というものに対して真摯に向き合っている方々と情報交換をすることができたのも貴重な経験と自分自身の大きな刺激になった。
- (8) 学力重視の韓国の方に日本の現状や文化である「価値観の多様化」や「知徳体」を理解していただくのに言葉と時間を要したことも驚きを覚えた。

(1)～(8)のように、現職教員のレポートからは、これまでの日本で行ってきた教育について、韓国の教育という新たな視点を得たことで、自分の教育観や教育方法、教師像などについて客観的に振り返るきっかけになっていたことが分かる。

次に、ストレートマスターの参加者のレポートの一部を取り上げる。

- (9) 初めて海外に行くことでさらに世界を知りたくなりました。そして、世界を知ると今まで見てきた日本が違って見えることを実感を持って感じることができました。
- (10) 韓国では日本で当たり前だと思っていたことが通じなかつたりするので、逆に日本で当たり前だと思っていた前提を意識することができます。
- (11) 一人一人が直接話し、互いの文化、価値観、国民性、人間性を理解し合うことはそう難しいことではないということが今回初めて海外の方と接して感じる事ができた。
- (12) 韓国の異文化を感じることで、初めて自国の文化を知ることになり、他国の文化の新鮮さや内容を認めることで、より広い視野を持つことが

できると感じた。日本の小学生はひとりひとり個性的で、魅力的な個性を持ち合わせている。そんな違う子どもたちが何人も集まる教室は、そんないろいろな価値観が入り交ざっていて、韓国に行った時のような新鮮な感覚を味わうことも多い。韓国に行つてのとても大きな収穫は、価値観の違いを体験したことによる、価値観の重要性を知ることができたということである。

- (13) 韓国では世界に通じるグローバル人材を育成しようとする意識が高く、教育に社会全体が投資していることを強く感じさせられた。現地の方から「韓国は大陸と陸続きだし、小さな国だから国力がないといけない」というお話を伺い、子どもをグローバルな視点から国の将来を担う存在として捉えて、学校教育が行われている様子を理解することができた。
- (14) これから学校現場に出ていく身として、日本の学校教育を多面的に捉える素晴らしい機会となった。
- (15) 英語の教員を目指している私にとっては、韓国で英語の授業や施設を見る機会が多かったことはとても良い経験となった。
- (16) 韓国の特殊教育はどのように行われているのかということを経験や実際の観察、現場の先生の話から知ることができた。担任の先生の工夫とそれに対する周囲の子どもの理解が必要不可欠であることが分かった。

(9)～(12) では、ストレートマスターの参加者が韓国という異なる文化に接することから日本を見つめ直していること、視野が広がったこと、価値観、交流の大切さなどについて学んでいたことが分かる。(13)～(15)からは、教員としての新たな観点が得られていたと思われる。

5. まとめと今後の課題

本稿では、平成24・25年度の海外研修の概要や内容について報告し、参加者の学びをふり返りアンケートとレポートの分析によって、検討した。

アンケートの結果から、本研修の満足度は高いと言える。また、レポートから韓国の教育という新たな視

点を得ることで現職員が、日本の教育を客観的に捉えることができていた。特に、教員自身のこれまでの教育活動や教員生活、教員としての自分の在り方などを振り返るいい機会になっていたことが分かる。

一方、ストレートマスターには現職教員の学びとは大きく異なる点があることも分かった。現地の人々との交流や異文化体験、言葉の通じない体験など、様々な新しい体験を大変だというよりもむしろ楽しいものだと積極的に捉えていて、異なる文化や環境を受けとめようという意欲が見られた。これは、ますますグローバル化が進む社会の中で、子どもたちを指導する教員として貴重な経験となることであろう。

短期海外研修は、教職大学院の多忙なカリキュラムの中で実施している。夏季休業中であるとはいえ、実習などが多く入っていて、事前研修の日程を決めるのさえ難しい。しかし、このような限られた時間の中でも、参加者が主体的に学び、現地の人々と積極的に交流することで、多くの学びが得られている。海外での学校見学や教員・学生との交流は、参加者にとって有意義な体験となっていることは間違いない。今後も研修内容の充実を図るとともに、参加者の要望に応えられるように改善を加え、実施していきたい。

付記

本研修に関わったすべての皆様、アンケートとレポートにご協力いただいた受講生の皆様に感謝申し上げます。

文献

- 대구교육대학교 대구부설초등학교『2012학교요람』(大邱教育大学大邱附設初等学校『2012年学校要覧』)
- 大邱教育大学学校教育大学院 (2011)『学生・運営概要』(2012年9月配付資料)
- 대구용계초등학교『2013대구용계교육』(大邱ヨンゲ初等学校『2013大邱ヨンゲ教育』)
- 대구경북영어마을(大邱慶北英語村 平成25年9月24日配布資料)
- 慶北大学教師範大学附設中学校「学校要覧」(平成24年9月24日配布資料)
- 後藤太郎・荒尾浩子(2013)「オークランド大学教育学部との連携による教育研修の実施」『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第33号, 27-31.
- 法務省「平成25年末現在における在留外国人数について(確定値)」
<http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/>

- nyuukokukanri04_00040.html (平成26年9月18日閲覧)
- 本田 勝久・山本 長紀 (2013)「小学校外国語活動を担当する教員養成：海外教育実習を通して」『日本教育大学協会研究年報』31, 133-142.
- カレイラ松崎 順子 (2013)「『ソウル英語村ブンナブキャンプ』のプログラム評価」『アジア太平洋研究 (38)』, 79-94.
- 小林文生 (2013)「短期海外研修による教育的効果の再検討：学生の報告書の多面的な分析を通して」『人文・自然研究』第7号, 162-185.
- 三石初雄 (2008)「東アジア地域における高等教育機関での教育研修の動向を探る－韓国と中国における大学・大学院の現職教育研修から－」東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター編『東アジアの教師はどう育つか－韓国・中国・台湾と日本の教育実習と教育研修－』89-103.
- 宮城教育大学 (2010)『平成22年度大学間特別交流事業-大邱教育大学校他との日韓交流体験-』
- 宮城教育大学 (2011)『平成23年度大学間特別交流事業-大邱教育大学校他との日韓交流体験-』
- 宮城教育大学教職大学院 (2012)『平成24年度 海外教育事情 総合演習 報告書』
- 宮城教育大学教職大学院 (2013)『平成25年度 海外教育事情 総合演習 報告書』
- 文部科学省『小学校学習指導要領』
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/index.htm (平成26年9月18日閲覧)
- 文部科学省 (2008)「日本語指導が必要な児童生徒の受入れ状況等に関する調査(平成24年度)」の結果について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/04/_icsFiles/afiedfile/2013/04/03/1332660_1.pdf (平成26年9月18日閲覧)
- 文部科学省・教職課程の質の保証等に関するワーキンググループ「第4回配付資料1 教員養成課程のグローバル化対応に関する検討事項について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/093/093_1/shiryo/attach/1329286.htm (平成26年9月18日閲覧)
- 文部科学省国立教育政策研究所・JICA 地球ひろば共同プロジェクト (2014)『グローバル化時代の国際教育のあり方 国際比較調査 最終報告書 (第2分冊) (案)』
http://www.idcj.or.jp/pdf/reference_20140308.pdf (2014年9月18日閲覧)
- 長島明純 (2011)「教職大学院における海外実地研修の意義—『教育課題実地研修』(中華人民共和国)についての報告—」『通信教育部論集』第14号, 115-129.
- 日韓教育大学長会議 (2013)『第6回韓・日教育大学長FORUM』 (2013年10月配付資料)

(平成26年9月30日受理)